

Title	メルロ=ポンティと生き方の問い : 交流の問題を中心に
Author(s)	川崎, 唯史
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61400
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (川 崎 唯 史)	
論文題名	メルロ=ポンティと生き方の問い ——交流の問題を中心に——
論文内容の要旨	
<p>【本論文の目的】</p> <p>本論文の目的は、「どう生きればいいのか」という問い（以下、「生き方の問い」と呼ぶ）に一つの答えを与えることである。この問いは、まず私自身にとってもっとも緊急で重要な問いであり（「ひとごとではない知」）、哲学・倫理学の研究者だけでなく社会の中で生きる人々にとっての問いでもある（「社会のベッドサイドへ赴く哲学」）。本論文は従来のな文献読解を方法とするが、目的において一つの臨床哲学の試みであろうとする。</p> <p>生き方という広大な主題の中で、本論文がとくに重視するのは他人との「交流」である。社会とは何よりもまず多数の他人がともに生きることを基礎とするからであり、他人との関わり方が私にとって最大の困難だからである。本論文では20世紀フランスの哲学者メルロ=ポンティの文献を取り上げるが、この選択も交流の問題に焦点を当てることによる。メルロ=ポンティは、間主観性の現象学によって他人の問題を哲学の主題に押し上げたフッサールの精神を引き継いで、交流の問題をきわめて重要なものとして、しかも実際の経験の記述を通して考察した哲学者だからである。しかもメルロ=ポンティは、交流の問題には道徳に関わる側面があると考えており、この点で私と問い——他人と交流する中でどう生きればいいのか——を共有していると言える。それゆえ、メルロ=ポンティによる交流の道徳的側面についての論述を理解することが、問いに答えるために本論文で取り組む主要な課題となる。</p> <p>【本論文の構成】</p> <p>メルロ=ポンティはまとまった道徳論を著しておらず、体系的な倫理学を構想した痕跡も見られないが、交流における道徳を主題とした論文「小説と形而上学」（1945）が存在する。主著『知覚の現象学』と同年に発表されたこの論文は、メルロ=ポンティが哲学に基づいて道徳を論じようとしていたことを示すだけでなく、その仕方をも示唆している。そこで本論文は、この論文の最後の一文を手引きとすることで、メルロ=ポンティが道徳を語る理路の解明を試みる。「価値は、私たちが偶然そうであるところのものに能動的になることのうちに、他人や私たち自身との交流のうちにある。この交流について、私たちの時間的構造はその機会を与えており、私たちの自由はその下書きにすぎない」。したがって、本論文の第一章では交流を可能にする「私たちの時間的構造」について、第二章では交流を素描する「自由」、および「私たち自身との交流」について、そして第三・四章で「他人との交流」について考察する。</p> <p>第一章「誕生」では、主体性の時間的構造を論じた『知覚の現象学』第三部を取り上げる。まず、三部からなる同書の構成を検討し、第一・二部での現象学的記述を真剣に受け止めて主体性の概念を更新するという任務が第三部に割り当てられていることを示す。次に、第一部と第二部の中心的な論点を概観し、前者では与えられた状況から身を引きはがし、抽象的空間や言語的世界といった新たな状況を重層させる「投射」の機能が強調される一方で、後者では前人称的な知覚主体としての身体と自然的世界との「密着」の側面が前景化していることを確認する。そこから、第三部の具体的な課題とは、離脱と密着という対照的な契機を相容れるものとして、「誕生」の出来事において主体性に組み込むことであるという仮説を立てる。本論文では、主体性の構想を素描する第二部最終章に見られる「私は私自身に与えられている」という定式を軸に第三部を読解することで、上の仮説の証明を試みる。この定式は、世界へ投げ込まれている（つまり生まれてきた）ことを指す「私は与えられている」と、経験の主体として距離をとる力を指す「私自身に」の両面、つまり密着と離脱が、誕生の出来事によって一挙に創設されることを示す。第三部では、生を「様々な状況をもつ可能性」とした上で、諸状況を外面的に総合するのではなく、絶えず移行を遂行することで唯一の「生の連関」を続ける時間性として主体性が深められる。断片的な瞬間の集合ではなく、現在が過去を引き継ぎ未来に向かうという流れとしての時間、これが誕生した主体の根底的な構造であり、自由と交流を基礎づける。</p> <p>第二章「自由」では、まず『知覚の現象学』最終章「自由」を検討して、離脱と密着に対応して「中断の自由」と「動機づけられた自由」が提示されていることを確認する。次に、やはり1945年発表の「セザンヌの疑い」を取り上</p>	

げ、自然的世界への遡行だけでなく人間的世界への復帰でもあるセザンヌの表現において、二つの自由が統合されるとともに、他人たちを呼び寄せる新たな文化の創設という仕方ですでに交流も論じられていることを示す。章の後半では、自分の過去との関係における自由（私たち自身との交流）について考察する。この問題に関して、メルロ＝ポンティは精神分析の「多元決定」概念を自分なりに捉え直して用いる。人間の行為は、過去や性といった様々な観点から多元的に解釈可能である。逆に言えば、コンプレックスを形成するような特権的な重みをもつ過去であっても、単独で行為を引き起こす原因とは言えない。むしろ、自由を発揮する表現行為には、過去を引き受けて「意味するシステム」に変化させる「私たち自身の創造的な捉え直し」が見出される。自己自身との交流とは、過去という所与を無に帰すのでもなくこれに支配されるのでもなく、「応答」することに存するとされる。

第三章「交流」では、前二章を前提として、他人との交流を主題化する。まず『知覚の現象学』を中心に、メルロ＝ポンティが交流の可能性を立証する次第を追う。自他未分の前交流を基礎に据えるシェーラーと、他人の生きる状況は原的には私に与えられないとするフッサールに学んだ上で、メルロ＝ポンティは第一章で見た主体論によって自他の区別を前提とした交流を論じる。ここで「私は与えられている」は私が身体をもって世界に状況づけられるがゆえに他人に知覚されうることを意味し、「私自身に」はその状況が他ならぬ私の経験であることを指す。前者なしに後者だけが実際に成立すると考えれば主張としての独我論が帰結するが、メルロ＝ポンティのいう主体は「弱さ」をもち、自己を表現せずには存在できない。私と他人がそれぞれ自己を表現することによって両者の交流は遂行される。

間主体性の概念は、以上のような交流の可能性を意味する一方で、その困難をも含意する。本論文ではその困難に立ち入って考察することで、メルロ＝ポンティが交流に道徳を見出すことの背景に光を当てる。主体性を間主体性として捉え返すとは、私とは私自身にとっての私であるだけでなく他人にとっての私をも構成的に含んでいること、さらには後者が前者の地をなしてさえいることを意味する。それゆえ、私の行為や生は他人たちから様々な意味づけを受けることを避けられない。ボーヴォワールの『招かれた女』を読解する「小説と形而上学」では、再び多元決定概念とともに、こうした主張の道徳論的な含意が明示される。つまり、ある行為が多元的に解釈され、唯一の真なる意味を確定できない以上、ある出来事についての責任を誰かに正しく帰属させることも不可能とされるのである。

メルロ＝ポンティによれば『招かれた女』は、既存の道徳を前提せずこうした間主体性の本性を明るみに出す「無道徳的文学」だが、それだけではない。セザンヌが文化を創設するのと同様に、ボーヴォワールも「真の道徳」を示唆している。第三章の最終節では、愛という行為を範例として、真の道徳が何に存するかを考察する。「懐疑的な実存主義」なる立場は、実存や行為や時間を外面的に分解して無意味にするが、そこでは愛も他人そのものではなくその性質（美しさなど）への愛にすぎないとされる。そのような愛も存在するが、メルロ＝ポンティが道徳的価値を見出すのは、時間を横断し、性質を超えて他人に向かう愛である。本論文ではこの愛について、他人を自由にすべく関与することである「尊敬」と、果たせる保証のないまま交わされる「約束」の観点から考察する。メルロ＝ポンティのいう価値とは、理念として行為の規則を課すものではなく、人間の果敢な行為から結実しうる実効的なものである。

第四章「歴史」では、前章で棚上げした歴史的・社会的状況を考慮に入れた上で、引き続き道徳的な交流を考察する。まず『知覚の現象学』において、歴史が多数の他人との共存の場として捉えられ、対象としてではなく主体性の次元としての「社会的なもの」の観点から考察されることを確認する。性質にも階級やネーションなど社会的なものが存在するが、1945年の論文「戦争は起こった」では、占領下の対人関係におけるフランス人・ドイツ人・ユダヤ人といった性質への「一般化」という暴力的な現象の解明へと議論が進展する。歴史的状況においても従来の道徳が成り立たないことが示されるわけだが、ここでもメルロ＝ポンティは反道徳主義に陥ることなく、新しい道徳を生み出す行為を記述しようと試みる。「英雄」や「プロレタリアート」の行為もその一つだが、本論文では無道徳的な状況の中で価値の実現を試みる交流に焦点を合わせるため、『ヒューマニズムとテロル』（1947）に含まれるブハーリン裁判の記述を取り上げる。歴史の中で主体たちは現在を読み解いて未来の曖昧な見通しをもつが、歴史の展開によって権力を握った者の見通しが裁判の審級となる。ソ連の反動的な裏切り者として意味づけられた政治家ブハーリンは、「他人から見た私」に課せられる「歴史的責任」を引き受ける（「客体的道徳性」）。メルロ＝ポンティは彼の弁明に、自己自身を告発しながら政治家としての名誉を暗に擁護するという「アイロニー」を認め、この分裂を「悲劇」と呼ぶが、そのヘーゲル的な歴史哲学ゆえにそれ以上の評価を与えない。これに対して、本論文ではブハーリンの弁明を未来のポリシェヴィキへの「呼びかけ」でもあったと捉え直し、歴史における道徳的な交流の試みを見出す。

以上のようにメルロ＝ポンティ哲学の道徳的・実践的な諸帰結を考察することを通して、本論文では生き方の問いに取り組む。結論として出される答えは、与えられたものを自分なりに引き受けながら、他人たちとの関係に積極的に入り込むことで、自他の自由を実現しようと試みることである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (川 崎 唯 史)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 浜渦 辰二
	副 査 大阪大学 教授 堀江 剛
	副 査 大阪大学 教授 村上 靖彦
	副 査 立命館大学 教授 加國 尚志
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：メルロ=ポンティと生き方の問い

—交流の問題を中心に—

学位申請者 川崎 唯史

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 浜渦 辰二

副査 大阪大学教授 堀江 剛

副査 大阪大学教授 村上 靖彦

副査 立命館大学教授 加國 尚志

【論文内容の要旨】

本論文は、20世紀フランスの哲学者・現象学者メルロ=ポンティの哲学の文献を手がかりに、とりわけ他人との交流の道徳（モラル）に関わる論述を読解しながら、それを単なる文献研究にとどめるのではなく、自ら「どう生きればいいのか」という「生き方の問い」に自分なりの答えを与えようとする、一つの臨床哲学の試みとして書かれたものである。

序章では、本論文の問いが何よりも「人はどう生きるか」という問いにあること、そのために採用される方法が文献読解という伝統的な哲学の手法であるのは、答えがあるかどうか不明な問いに取り組み、その途中経過としていくつかのテキストを遺した1人の先輩としてメルロ=ポンティに接するからであること、そのような仕方できている人のために書かれていることに臨床哲学のあり方を求めたこと、そしてそのためになぜメルロ=ポンティが選ばれ、なぜ彼のある特定のテキストが選ばれたのかが、明らかにされている。

第1章「誕生」では、主体性の時間的構造を論じた『知覚の現象学』第3部「対自存在と世界内存在」を取り挙げ、「私は私自身に与えられている」という定式を、一方で、世界に投げ込まれている（生まれてきた）ことを指す「私は与えられている」と、他方で、経験の主体として与えられた状況から距離を取る力を指す「私自身に」という、密着と離脱という対照的な契機が「誕生」において一挙に創設されることを論じている。

第2章「自由」では、『知覚の現象学』最終章「自由」において、前述の密着と離脱に対応して「動機づけられた自由」と「中断の自由」が提示され、『意味と無意味』所収の「セザンヌの疑い」において、二つの自由がセザンヌの表現において統合されるとともに、他人との交流がすでに論じられていることが示され、精神分析の「多元決定」概念が人間の行為の多元的解釈を可能にするものとして取り挙げられている。

第3章「交流」では、『知覚の現象学』ですでに、自他未分の前交流（シェーラー）でも他人が原的に与えられない共現前（フッサール）でもない、自他の区別を前提とした交流が論じられており、「間主体性」の概念がこのような交流の可能性を意味するとともに、その困難をも含意するものとして導入され、ボーヴォワールの『招かれた女』を読解する、『意味と無意味』所収の「小説と形而上学」では、前述の「多元決定」概念にとともに、或る出来事についての責任を誰かに帰属されることの不可能性が説かれる。そこにおいて、「性質」を越えて他人に

向かう「愛」が、果たせる保証もないまま交わされる「約束」と、「2人での存在」の潜在していた亀裂の顕在化において考察される。

第4章「歴史」では、交流の問題が、2人や3人での実存を超えて、不特定多数の意識との共存という歴史的・社会的状況のなかで考察され、雑誌『現代』創刊号（1945）に掲載された論文「戦争は起こった」では、反道徳主義に陥ることなく、新しい道徳を生み出す行為を記述することが試みられ、『ヒューマンイズムとテロル』（1947）の第2章「ブハーリンによる歴史の両義性」で論じられるブハーリン裁判を取り挙げ、その両義性とは、「他人から見た私」に課せられる「歴史的責任」を引き受けながら、未来へのポリシェヴィキへの「呼びかけ」でもあったと、そこに歴史における道徳的な交流の試みを見出している。

こうして、この時期のメルロ=ポンティが「真の道徳」として構想していたことは、与えられたものを自分なりに引き受けながら、他人たちとの関係に積極的に入り込むことで、自他の自由を実現しようと試みることであったことを、本論文の結論として導き出している。

最後に参考文献リスト8ページ（仏語・英語文献4ページ半、邦語文献3ページ半）を付し、全体の分量としては、A4判横書きで130ページ、400字詰め原稿用紙に換算して、約440枚に相当する。

【論文審査の結果の要旨】

文献読解という従来の研究方法を踏襲しながらも、生きていく人に向けて、生きていく人にとっての死活の問いを考察することにおいて、臨床哲学の研究となろうとする意欲に貫かれた論考として評価された。

文献読解という方法に限って見ても、従来、メルロ=ポンティの後期哲学からそこに至る途上として捉えられがちだった初期・中期の著作を独自の思索を展開するものとして読み直し、初期・中期に焦点を絞って考察したとはいえ、国内外の先行研究を同世代の研究に至るまで精査し、それらを踏まえながらも、これまでの先行研究では見落とされがちだった「誕生」「愛」「革命裁判」といった意外な切り口から光を当てるといふ、オリジナリティをもった意欲的な論考である。この点において、副査として学外から審査に加わっていただいたメルロ=ポンティ研究の第一人者から、メルロ=ポンティ研究としても高い評価が与えられたことは、特筆に値する。

公開審査会では、①ここで論述されるメルロ=ポンティの「真の道徳」への道が、従来の道徳論・倫理学の議論・歴史のなかで、どのように位置づけられるのかについての論述があるべきだったのではないかと、②本論文はメルロ=ポンティの当時の実存主義的な動向との繋がりを見直すことにもなっているが、だとしたら、交友関係のなかで共感と対立のなかにあったサルトルおよびボーヴォワールとの対比や影響関係についての考察があったほうがよかったのではないかと、③フッサールから継承したはずの「超越論的な領野」への問いを「誕生」のなかに見ようとしたことは分かったが、その「新たな超越論哲学」の構想が後半の交流の議論にどう生かされているのかが必ずしも明らかではない、④本論文で展開された初期・中期の議論には後期のメルロ=ポンティでは自己批判され消失することになるところがあるが、だとするとここで描き出された構図はもはや後期では維持されないことになるのかどうか、といった疑問も出された。これらの疑問に対して筆者からは不十分であれ、いまの時点で考えていることが答えられたが、これらの疑問は、本論文の扱った問題の射程を越えたこれからの課題を示すものであり、本論文の本質的な価値を損なうものではない。本論文が、文献研究としても高いレベルを維持しつつ、オリジナリティのある臨床哲学にふさわしい議論を展開してみせたという点において、評価に値するものとして意見は一致した。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。